

研究課題別事後評価結果

1. 研究課題名： 海洋生物の遠隔的種判別技術の開発

2. 研究代表者名及び主たる研究参加者名(研究機関名・職名は研究参加期間終了時点):

研究代表者

赤松 友成(国立研究開発法人水産研究・教育機構中央水産研究所 主任研究員)

主たる共同研究者

澤田 浩一 (国立研究開発法人水産研究・教育機構水産工学研究所 グループ長)

川口 勝義 (国立研究開発法人海洋研究開発機構 地震津波海域観測研究開発センター 研究開発センター長代理)

松尾 行雄 (東北学院大学教養学部 教授)

3. 事後評価結果

○評点:

A 優れている

○総合評価コメント:

本課題は、パッシブとアクティブの音響探査技術を使って広域での海洋生物の分布を可視化することを目的としているが、課題の抽出・解決のサイクルをうまく回すことにより当初の目的はほぼ達成したと判断される。特にパッシブ観測用に開発した測器を使った広域な実海域での観測網の構築により、海洋生物の種別分布図を描く所まで達成した点は高く評価できる。また、鯨類に関してはその行動解析など他ではできない優れた成果を挙げており、希少種保護の観点から関心の高い鯨類におけるモニタリングシステム構築に有用な基盤技術を創出することができた。

一方、課題としてはパッシブやアクティブ観測による様々な地点での興味深い基礎的なデータは得られたものの、全体システムとしてどのようにすればどの程度の精度で魚種分布の推定が可能か、現実に適用出来る提案が求められる。すなわち、音響探査技術で得られた推定結果の信頼性や実用性を明確にするために、正確性などについての統計的評価結果を示すなど、技術として成熟させる努力が必要である。

今後、漁業での利用なども含め、幅広いユーザーに利用して貰うことを想定した場合、提案された複数の方式について、それぞれの適用先や範囲、測定精度、またそれらを踏まえた対象魚種・エリア毎の推奨されるシステムの組み合わせなどを分りやすくまとめて欲しい。また、生物多様性や希少性生物保護のためのツールとして、より簡便に利用できるようにするとともに、本課題で開発された機器が広く海洋関連のアウトリーチ活動にも活用されることを期待したい。